

令和2年6月30日



7月 釜小だよ

横浜市立釜利谷小学校

釜小Web <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kamariya/>



水泳学習のない夏

校長 菊池 幸博

今からも50年近くも昔の話であり、また私事で大変恐縮ではありますが、初めて泳ぎを覚えたのが小学校でのプールの授業でした。はじめは浮くこともおぼつかなかったのですが、集団で輪になりプールのなかをぐるぐるとみんなで回り流れを作りました。(現在の学校体育では危険なのでこうした行為は行っておりません)この流れに乗ることで自然と体が浮き、そして前へ前へと流されながらも泳ぎ進んでいるという感覚を覚えることができました。流れの中で顔を水につけて息を吐き、そしてまた水面に顔を上げて息をする。息継ぎの仕方ものときに体が覚えてくれたようです。

それからは夏のプールでの学習や夏季休業中の水泳教室が大変楽しみになり、高学年では大会にも出場できるようになっていきました。記録自体は大したタイムは出せませんでした。それでも夏の日差しの中で目標に向かい、へとへとになるまで泳いで楽しい時間を過ごしたと、子ども心に思ったものです。当時スイミングクラブ等はほとんどなく、一部の友達が通っている程度でした。市の水泳大会も横浜国際プールではなく現在は取り壊されてしまった野毛プールで行われていました。

私自身が教員となって、プールでの学習に取り組む中、もっとうれしく感じたのは、速く泳げる子を育てたことではありませんでした。それよりも「水が怖い」「少ししか泳げない」「息継ぎができない」など、どちらかという泳ぎを苦手としている子どもたちと一緒に取り組み、子どもたちが進歩する様子を間近で見られたときでした。「顔を水につけられた!」「ブクブクと息がはけた!」「3回息継ぎができた!」など、その子の成長がまさに目の前で見られるのです。そしてその延長線上には「25m泳げた!」があり、この目標を達成できた瞬間の子どもたちの顔は、どの子も本当に輝いていました。

4月から3か月におよび、臨時休業や分散登校、半日授業等を重ねてまいりました。その間、保護者の皆様には様々な面でご支援をいただきました。ありがとうございます。いよいよ7月からは通常運営に入ります。とはいえ、3か月間のダメージは小さなものではありません。この失われた時間をカバーしながら、学びをつくっていかねばなりません。教科間の横断的な取り組みや、教科内でも学ぶ内容を統合したり精選したりしながら、効率的な授業づくりも考えていかなければなりません。しかしもっとも大切にしていかなければならないのは、子どもたちの「できた」「わかった」です。目の前の子どもを輝かせるために取り組んでいきます。

残念ながらこの夏はプールでの学習も夏季水泳教室も実施できません。しかし、日々の学習の中で子どもたちの「できた」「わかった」をつくっていくことこそが、子どもたちにとっても、私たち教職員にとっても大切なことだと改めて考えています。